

社会臨床ニュース

第109号

2022年10月21日

発行：日本社会臨床学会 事務局〒113-0021 東京都文京区本駒込5-46-10 子問研

e-mail: shakai.rinsho@gmail.com

日本社会臨床学会第30回総会を終え...「あっ」と驚く秋の学習会へ！

長い猛暑の時を抜け、ようやく爽やかな秋の光線を感じられる気候となりました。さる5月7・8日の総会開催（於・ウィリング横浜）のご報告と「社会臨床雑誌（社臨誌）第29巻2・3合併号」発刊が、大変遅れてしまい申し訳ありません（まもなくお届け致します）。

5月の総会には2日間のべ89名のご参加をいただきました。活動報告・計画・予算・決算は議案通り可決されました。シンポジウム・交流会にお集まり頂いた会員・非会員のみなさま、コラボ交流頂いた（KP）神奈川精神医療人権センター・日本臨床心理学会有志のみなさまにも深くお礼申し上げます。詳細記録は追って「社臨誌」第30巻1号にてお知らせ致します。

さて、直前のご案内となりますが、次頁の通り、秋の学習会を開催致します。どうやら本学会は、そう簡単に「消え」るわけにもいかない？まだ「消え」ない古参のみなさまも、どうぞこの「汽笛」や新世代の登場に誘われ、奮ってご参加下さい！！

日本社会臨床学会第15期運営委員会



社会臨床学会秋の学習会



「反臨床心理学はどこへ消えた？」～そんな汽笛に誘われて！

日時：11/12（土）17時半～21時（参加費千円・学生他半額割引あり）

会場：神奈川県地域労働文化会館（横浜市南区高根町1-3）二階会議室 AB

横浜市営地下鉄坂東橋駅歩2分・京急黄金町駅歩5分・JR 関内駅歩15分

「反臨床心理学はどこへ消えた？」（注1）、「この臨床心理学を脱ぐ」（注2）、「開かれた対話へ」（注3）—など、昨今の臨床現場周辺では、心理主義・自己責任追求の時代から少しずつ、対話・社会モデル（注4）や人類学から学ぶ（注5）時代などへと、川の流れの変化が囁かれているようです。が、その水面下では尚、「笑えない」この国の臨床・教育・労働・入管他の制度・状況の底流が澱んだまま？ その川床や堤防と、私たちの暮らしの流れとの関係性は、膠着したまま動いていない？ そこをどう問う？ そこをそこそこおさらいし合う。いまここ横浜にて。まだ「消え」ない「難破船」社会臨床学会号・乗組員たちと、今回初登場のスペシャルゲストお二人をお迎えし、これからもうすぐ、こんばんは！（注6）

学習会プログラム

1. 中島浩壽（なかじまひろかず）（社会臨床学会・元運営委員長）

「臨床」への問い、そして臨床心理学会・社会臨床学会の基本的姿勢

私は1970年代後半から1991年まで臨床心理学会に所属し、その後、社会臨床学会に設立当初から現在までかかわってきています。そこでの経験を踏まえて、二つの学会の基本的姿勢と、「臨床」的行為への問いについて考えていこうと思っています。また、その姿勢を現代臨床心理学の世界に抱きしめようとする現在の動向についての疑念も語れればと思っています。

プロフィール

慶應大学文学研究科修士課程を卒業後、1972年から2年間パリ大学ヴァンセンヌ校哲学科に留学。1977年~83年、東京都立高校教員。その後YMCA フリースクール、神奈川県立高校、法政大学で講師を勤める。現在、河合塾 cosmo 講師、YMCA オープンスペース LIBY 運営委員。著書・「逃げ出した教師の学校論」(労働経済社)「心を遠隔管理する社会」(現代書館)「『不登校』は心の問題なのか?」(書籍工房早山)小沢牧子さんとの共著・「心を商品化する社会」(洋泉社) 分担執筆・社会臨床学会編「心理主義化する社会」(現代書館) 他。ネット掲載記事・「不登校50年証言プロジェクト」他

2. 河野陽斗(こうのあきと)さん

(東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻相関基礎科学系修士1年)

「日本の「臨床心理学」における対立の歴史的・理論的考察」

心理学が「科学的」であるとはどういうことか、という科学哲学専攻としての疑問から出発して文献を読み進めると、それは日本の「臨床心理学」分野ではかなり激烈に議論を重ねられたテーマであったことが分かりました。この度は、その展開を「外」の立場から整理することで、「心理臨床学」(=臨床心理士心理学)や「現代臨床心理学」(=公認心理師心理学)のテキストに政治的な機能を読み取ることを試みた卒業論文について発表させていただきます。

3. 指定討論：石原孝二(いしはらこうじ)さん

(東京大学大学院総合文化研究科教授)

オープンドialog・ネットワーク・ジャパン共同代表。東京精神医療人権センター共同代表。『精神障害を哲学する：分類から対話へ』東京大学出版会、2018年、『オープンドialog 思想と哲学』『オープンドialog 実践システムと精神医療』(共編)、東京大学出版会、2022年、J.モンクリフ『精神科の薬について知っておいてほしいこと：作用の仕方と離脱症状』(共訳)日本評論社、2022年

4. 中島さん・河野さん・石原さんの三者対談

(司会)伊藤書佳(いとうふみか)

社会臨床学会第15期編集委員長/不登校・ひきこもりについて当事者と語り合う いけふくろうの会

5. 会場参加のみなさんと質疑・対話

(司会)土田麻子(つちだあさこ) 社会臨床学会第15期運営委員

広瀬隆士(ひろせたかし) 同 第15期運営委員長/KP相談員

—注記—

(注1)「特集・臨床心理学を再考する」(金剛出版/「臨床心理学」増刊第14号・2022年8月参照)の編者・東畑開人氏がこのタイトルで論考を発表し話題沸騰。多元的諸分野からの論考も所収。臨床心理学が社会的・政治的状況をスルーし、諸問題の所在地を「自己責任」に帰し、「専門家」権力により分類・診断・治療してしまう暴力性や、昨今の障害学の中では主流となっている「社会モデル」からの視野欠如への「再考」等を、日本の臨床心理学界の今後に向け必須と求めている。が、そもそも上記のどれもが、かつて1970年代前後から今日に至るまで、日本臨床心理学会(日臨心)改革・自己批判・資格専門制度反対を先鋭的に歩んだ「改革派」たちからの追求テーマに含まれていた。が、当時の精神保健法体制構築への厚労省・諸団体参加テーブル(精従懇)への着席拒否・心理職国家資格化反対を貫く路線が多数決僅差で敗れた「改革派グループ」は日臨心から去り、90年代から日本社会臨床学会(社臨)を立ち上げ「外海」へと出航した。このため、日本の心理臨床学界の視界から「反臨床心理学」が「消え」た? 他方、先鋭的に「外海」への航海に旅立った当時からの乗組員たちも、今や高齢化・引退に伴い、社臨学会も「難破船」化し「消え」そう?

(注2) (注1)の経緯の後、現在の公認心理師国家資格制度化への道行きに与してきた日臨心の中でも、さらに諸々の経緯や紆余曲折?を経て、資格制度化以降、新たな状況下で近年選出されたニューリーダー・滝野功久氏は、(注1)の経緯を特段重視し、社臨へと去った改革派たちによる学会改革・自己批判の中味こそが、日本臨床心理学会にとっても、最も大切な学会史であるとし、本年11/4~6日と13日の第58回学会大会においても、大会テーマを「この臨床心理学を脱ぐ」とし、上記東畑氏や文化人類学者の松嶋健氏らを「外」から招いている。

(注3) フィンランド・ラップランド地方の「オープンダイアログ」の実践からの学びが今、日本国内で盛り上がっている。

(注4) 松嶋健著「プシコ ナウティカ ― イタリア精神医療の人類学」(世界思想社2014年)は、「医療人類学を学ぶための60冊」(明石書店2018年)に選ばれている。

(注5) 「社会モデル」については、国連の障害者権利条約を参照。

(注6) 11月12日、この学習会当日、(KP)神奈川精神医療人権センター主催学習会「オープンダイアログとひきこもり支援」(斉藤環氏講師)も14時~17時に同じ会場で開催(合わせての参加もご検討下さい)。この案内ニュースは、そこでの配布も想定して作成。 (文責) 広瀬隆士



会費納入のお願い

日本社会臨床学会第XV期運営委員会

日本社会臨床学会の活動は、会員の皆様のご納入くださる会費にて賄われています。今年度会費未納の会員の方にはお手数をおかけしますが郵便振替にて以下の口座まで会費の納入をお願いいたします。年会費は6000円です。

郵便振替：00170-9-707357 日本社会臨床学会
(ゆうちょ銀行 店名〇一八 普通預金 0601545)